

千葉県立中央博物館

夏の展示「うみ鳥っぴ [umi-Trip] —海鳥とめぐる島の旅・半島の旅—」

開催期間：2021年7月3日（土）～2022年2月27日（日）

企画展会期：2021年7月3日（土）～2021年9月12日（日）



【企画展の内容・目的】

- 海の世界の頂点に位置し、漁業などの人間活動ともかかわりの深い海鳥の生態を探ることで、海の世界と海洋生態系と人間とのかかわりについて学ぶことができます。また、海鳥は行動圏が広く、海や島などの多様な環境をうまく使い分けながら暮らしています。海鳥を通じて環境を見つめることで、それぞれの地域・海域の特徴や魅力を知ることができます。本展示では、海鳥の視点から、海の魅力や海が抱える課題を紹介しました。
- 2 か所（東京都利島村・千葉県銚子市）で巡回展示を行うとともに、野外での海鳥観察会を実施し、多くの方が実際に海に足を運ぶ機会を提供しました。また、研究者による展示解説により、内容をより深く楽しく学ぶ機会としました。
- 最新の研究成果を取り入れた展示により、自然科学の楽しさと魅力を伝えます。また、生物学だけでなく、地学や歴史、産業などと関連した展示により、分野を横断して海について捉えることの大切さと楽しさを伝えました。

1. 企画展示の内容

- 開催期間：2021年7月3日（土）～2021年9月12日（日）
- 開催場所：千葉県立中央博物館 第1企画展示室・2階ホール
- 入場者数：12,195人



千葉県立中央博物館 外観



企画展会場 入口

会場に入って、まず初めに来場者を迎える展示物は、日本列島周辺の海底地形の模型です。海鳥は、海洋生物でありながら主に海面より上で生活していますが、あたかも海中の世界が見えているかのように、海の多様な環境をよく知り、うまく使い分けています。本展示のタイトルには、海鳥の目線で、海鳥の生息環境である海と、海に特徴づけられた陸地である島と半島の魅力を探る旅というコンセプトを込めました。海底地形模型によって、海鳥の展示ではなく、海鳥を通じて海を舞台とする環境・生き物・人のかかわりを伝える展示であることを来場者に印象付けて、本展示に導入しました。



冒頭の展示コーナー「島と海鳥のかかわり」には、ユニークな展示物として、海鳥繁殖地でもある有人離島（利島・粟島・天売島）の地形模型（当館ボランティアが制作）がありました。これにより、島は天敵が少なく安心して繁殖できること、同じ島の陸地を人と海鳥は地形によって住み分けていることなどを視覚で直感的に捉えられるような展示を目指しました。また、西之島や御蔵島を例に、火山の噴火で生まれた更地だった島が緑豊かで人が住める島に変遷してゆく過程で、海鳥が果たす役割（糞や死骸による栄養供給・種子散布など）についても学べるように工夫をしました。



2番目のコーナーは「房総半島の多様な海鳥」でした。会場である千葉県には、半島ゆえに外洋や内湾、岩礁や砂浜、干潟といった多様な沿岸環境があり、それぞれに多様な鳥類が生息しています。食物連鎖の頂点に位置する海鳥は、好みの餌生物や環境がないと生きていきません。これを印象強く伝えるためのユニークな展示として、コメツキガニの殻をたっぷり含んだ珍鳥・ハシブトアジサシの糞を、実際に九十九里浜で撮影されたこの個体の捕食シーンの写真とともに取り上げました。珍鳥の糞の展示により、マニアックな野鳥ファンにも満足してもらえるよう心がけました。

また、漁港などの人工的な環境をうまく利用して暮らす海鳥や、東京湾フェリーから観察される海鳥の生態など、海鳥観察に適したフィールドや観察すると面白い着眼点を紹介し、来場者が現地へ足を運びきっかけ作りを狙いました。



3番目のコーナー「海鳥と一緒に旅しよう」は、3部構成になっています。最初は「海鳥のいるマニアな世界」と題して、マニアの多い郵便と鉄道の世界の中に海鳥を見出しました。例えば、切手には天然記念物や、国立公園を代表する生物として描かれている海鳥がありました。海鳥が身近な地域の郵便局の風景印や鉄道のヘッドマークには、それぞれ地域ごとに異なる種類の海鳥が、その生息環境とともに描かれていました。

続いての「オオミズナギドリの長旅するわけ・できるわけ」では、伊豆諸島・利島で繁殖するオオミズナギドリの親鳥にGPSを装着し、行動圏を調べた最新の研究成果を披露しました。その広い行動圏を通じて、少産・長命の独特な繁殖戦略や、長距離を飛翔できる体の仕組みなど、幅広い視点からオオミズナギドリとその環境利用について学べる展示を目指しました。

最後の「定期航路で南北縦断！多様性あふれる日本の海鳥」では、定期航路から観察できる海鳥の写真や標本を、海域ごとの海底地形や周辺の花鳥繁殖地に関する情報パネルとともに紹介し、日本の海鳥相がいかに多様であるかを示しました。100年以上前に製作されたアカアシミズナギドリや、初公開の日本産唯一のハジロシロハラミズナギドリの剥製標本など、資料そのものの価値も非常に高いものが並んだ、様々な視点から楽しめる展示としました。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



最後のコーナーは「人と海鳥のかかわり」でした。このコーナーの前半では、絶滅の危機へと海鳥を脅かしている人間活動と、それに対する保護の取り組みについて、混獲・温暖化・人工光・海洋汚染・ノネコ等の外来捕食者を例に取り上げました。後半では、これまでに人間が海鳥から受けてきた恩恵として、羽毛やグアノなどの資源、海鳥を利用した漁業、信仰とのかかわり、観光や教育を通じた地域振興への活用について展示しました。

このコーナーでは、人間にとって、同じ海を利用して生きている海鳥がいかに尊い“隣人”であるかを感じてもらうことが最大の目的でした。そのうえで、将来にわたって人間と海鳥が共存してゆく上での課題や、その解決に向けて私たちができることを考えるきっかけ作りを目指しました。喫緊かつ深刻なこの課題に対して、歴史・民俗資料や観光グッズを組み合わせた展示により、多くの人にとって身近な自分事として捉える機会としました。

【来館者の声】

- プラスチックゴミをすてたりしないようにしたいし、外来しゅをもちこばないようにしたい。(10歳・女)
- 海は広く、たくさんの役割があると感じた。生態系を守るためにも、ゴミ問題について深く考える必要があると思った。(28歳・女)
- 海と生物、人間とは相互関係があり、お互いにうまく利用して成り立っていることを学んだ(32歳・女)
- 西之島に興味があったので、そこでの海鳥の役割を学べて良かった。(43歳・女)
- アホウドリの大きさにおどろいた。(35歳・女)
- 海は生きものたちにとってとてもたいせつ♡(9歳・女)
- 沖の方の島にも小動物がいておもしろい(5歳・男)
- アホウドリを見てみたい(10歳・男、6歳・女)
- 鳥が飛んでいる視点の動画が良かった。すごく速く飛んでいて驚いた。(8歳・女)

2. 関連事業の内容

■umi-Trip 展示室編「学芸員とおきの展示ウラ話」

【開催日時】2021年7月3日（土）～9月5日（日）

計11回 各回30分程度

【開催場所】千葉県立中央博物館 第1企画展示室

【参加者数】合計77人

【実施内容・目的】

- 初回の7月3日のみ、オープニングイベント「umi-Trip 出航式」として、学芸員が展示内容をダイジェストで解説しました。本展示の構成を的確に整理することで、その後各自で観覧する際のより深い学びを促しました。
- 2回目以降は、展示の一部を抜粋し、日替わりで解説しました。展示には表せなかったこぼれ話や、学芸員が込めた思いなどを直接伝えることで、内容だけでなく、学芸員の仕事や役割についても伝えられました。



受付の様子



ワイヤレスインカムの使用方法の説明



展示室での解説（「島」の漢字）



展示室での解説（日本の海鳥の多様性）

自由見学の展示観覧では、注目してほしいポイントに視点や注意を誘導できないことがあります。特に、離れた場所にある展示の内容を関連付けて考えることは難しいですが、解説

によって展示全体の意図や、個別の展示物に込めた思いを的確に伝えることができました。来場者には、あくまで海鳥を材料として、海の面白さを感じたり、環境問題などの課題について考えたりしてもらうことを期待していましたが、直接解説することにより、そのレベルまで効果的に誘導することができました。コロナ禍における開催となりましたが、ワイヤレスインカムを使用することで、学芸員と参加者が距離を保ちながら、小さな声で解説することができました。



模型を使った海底地形についての解説



展示室での解説（房総半島の海鳥）

【参加者の声】

- 海のプレートが陸のプレートに沈み込み火山や島ができるのが面白い。(15歳・男)
- 人が及ぼした影響を改善して豊かな海にしたい。(13歳・男)
- 島々が鳥たちのおかげで発展していったと思うと鳥の力ってすごい。(43歳・女)
- 海は単なる観光地と思っていたが、鳥との大切な関係がわかった。(66歳・女)
- 未来もきれいな地球でありますように。じゃない、私たちが守らねば。(71歳・女)
- 鳥と海を身近に感じるようになりました。(41歳・女)
- 海は大切に、とてもいい。(7歳・女)
- 「海」と「鳥」の日本人の長い付き合いについて改めてよく感じた。(65歳・女)
- 人と海は切っても切れない関係であること、海から人は恩恵を受け、信仰と親しみを持っていると感じ、学んだ。海を見られる旅をしたい。(45歳・男)
- 人と海と自然は様々な側面で密接に関わっていて、それを守り続けるには、決して1つではなくいろいろな工夫が必要だと感じた。(19歳・男)
- 人間活動の思わぬことが海や海鳥に影響を与えていることを知った。(45歳・女)

■umi-Trip フェリー編「海鳥の飛び方を見比べよう！」

【開催日時】2021年9月4日（土）10:30～13:00

【開催場所】東京湾フェリー

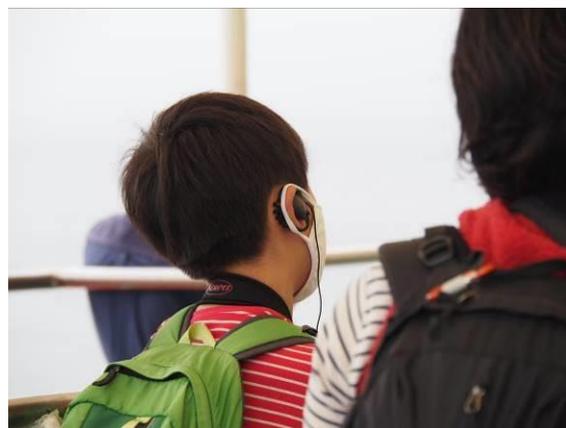
【参加者数】15人

【実施内容・目的】

- 穏やかな内湾を航行する東京湾フェリーに乗船し、海鳥観察を体験する講座を実施しました。誰でも気軽に乗れる航路での海鳥観察を普及し、多くの人に海に足を運ぶきっかけを提供することを目的としました。
- カモメ科のウミネコとミズナギドリ科のオオミズナギドリが観察できる季節に実施し、体のつくりや飛び方が異なる両種を見比べて、海鳥の多様性やそれぞれの生態を実感することを目的としました。



金谷港フェリーターミナルでの受付



参加者は全員ワイヤレスインカムを着用した



船上での海鳥の探索



船上での観察および解説

展示室では、展示パネルに加えてモニターで動画を流すことで、ミズナギドリ科やアホウドリ科が得意とする省エネな飛び方「ダイナミック・ソアリング」について解説していましたが、観察会をきっかけとして実際に本物を見ることで、参加者は飛躍的に理解と興味を深めることができました。

また、これまで移動手段としてしか認識されていなかった定期航路が、気軽に洋上に出て海鳥観察を楽しむための手段として利用できることを実感してもらうことができ、今後も盛

んに海に繰り出すきっかけを提供することができました。

船上では風が強く、機械音も大きいため、従来であれば大声で密集して解説しなければなりませんでしたが、そのため、コロナ禍における実施方法の模索が課題となっていました。ワイヤレスインカムを使用することで、学芸員と参加者が距離を保ちながら、小さな声で解説することができました。さらに、学芸員が参加者の方を向かずに、全員で同じ方向を見ながら海鳥を探索することができました。



両腕を広げて海鳥の飛び方を解説した



おすすめの図鑑の紹介

【参加者の声】

- フィールドの観察で生き物を感じられて良かった。(50歳・男)
- 海鳥が活着ているのを近くで見られて良かった。海を守りたくなった。(9歳・女)
- オオミズナギドリが海で飛んでいるのを見て、かっこよかった！(51歳・女)
- 動物への餌付けが、鳥にも影響があることを改めて認識した。餌を確保できるよう、海を守る必要があると感じた。(39歳・女)
- よく海鳥がごみで死んでしまうと聞く。海のごみを減らそうと思った。(9歳・男)
- 学芸員が、海の良さ、面白さを多くの人に伝えることが大切。(41歳・男)
- 海は海鳥にとって、海風を使ってロングトリップしたり、子育ての魚をとったり、生命の源であることがよく感じられた。汚さないよう、いっそう大切に守ってきたい。(41歳・女)
- 人間が捨てたゴミで生き物が命を奪われていることに気づいてくれる人が、100%になってほしい。(66歳・女)
- オオミズナギドリの飛翔、カワウやウミネコと全くちがった。(55歳・女)
- 海鳥によってちがう飛び方をしておりおもしろかった。(12歳・男)

■umi-Trip 漁港編「君たちは包囲されている！by カモメ」

【開催日時】 2022年1月22日（土） 10:30 ~ 13:00

【開催場所】 銚子漁港・銚子ポートタワー

【参加者数】 8人

【実施内容・目的】

- ふだん多くの人にとって訪れる機会の少ない漁港で、海鳥観察を体験する講座を実施しました。フィールドで生物を観察する楽しさを普及し、多くの人に海に足を運ぶきっかけを提供することを目的としました。
- 銚子漁港で越冬する多くのカモメ類を観察し、銚子ポートタワーの展望室から利根川の流れや太平洋に突き出た地形を俯瞰することで、カモメ類を取り巻く環境と水産業のかかわりを実感することを目的としました。



カモメ観察のポイントについての解説



練習を兼ね双眼鏡で遠くの凶鑑を読ませた



銚子漁港でのカモメ類の探索



みんなで同じ個体を観察し、特徴を確認した

展示室では、剥製標本や展示パネルで動画を流すことで、房総半島の海鳥の多様性や、外洋性の海鳥が見られる銚子半島の特徴について解説していましたが、観察会をきっかけとして実際に本物を見ることで、参加者は飛躍的に理解と興味を深めることができました。

また、利根川や海流によって銚子沖に好漁場が作られ、そこが海鳥にとっても良い餌場となっていることを展示パネルで解説していましたが、川の流れや地形を実感することは簡単

ではありませんでした。そこで、銚子ポートタワーに入場し、展望室から利根川の流れや海に突き出た銚子半島の地形を眺め、銚子漁港の規模の大きさを目の当たりにすることで、環境と海洋生態系と人間活動のかかわりを実感することができました。

漁港では風が強く、トラック等の走行音も大きいため、従来であれば大声で密集して解説しなければなりませんでしたが、コロナ禍における実施方法の模索が課題となっていました。ワイヤレスインカムを使用することで、学芸員と参加者が距離を保ちながら、小さな声で解説することができました。さらに、学芸員が参加者の方を向かず、全員で同じ方向を見ながら海鳥を探索することができました。



見られた種類などをおさらい



銚子ポートタワーでの解説

【参加者の声】

- カモメを見つけられて良かった。(10歳・男)
- 地形から見た海鳥のくらしが学べて良かった。海の豊かさを守っていくことが大切だと感じた。(39歳・女)
- 海鳥と海(銚子)の関係性がわかった。(12歳・男)
- タワーからのながめが良かった。河口の川と海のせめぎあい!水のうねりのダイナミックさ!を感じた。(71歳・女)
- カモメの年齢の見分け方がおもしろかった。銚子港はカモメにとっていい環境だということが分かった。(12歳・男)
- 海は栄養たっぷりなんだなあと感じた。カモメの年齢の見分け方がおもしろかった。海鳥は長生き!(37歳・女)
- 実際に漁港を歩いて話を聞いたのが良かった。海は一度壊したら元に戻らない大切なものと感じる。(61歳・男)
- 地形からも観察のポイントが知れて良かった。(40歳・男)

■巡回展1：

【開催日時】2021年9月27日（月）～12月3日（金）

【開催場所】利島村郷土資料館

【参加者数】69人

【実施内容・目的】

- 千葉県立中央博物館で実施した本展のうち、利島村とかかわりの深いストーリーを抜粋、編集してパネル展示を行いました。本展に来場できなかった利島村の住民や観光客に展示内容を伝えることで、海鳥繁殖地という視点で島について考えるきっかけを提供することを目的としました。
- 資料館に専門の学芸員がいない利島村において、最新の学術成果を通じて、自然科学や環境保護の重要性を普及することを目的としました。



利島村郷土資料館の外観



巡回展開催中であることを知らせる表示



展示室全体の風景



配布物を設置した展示室のロビー

限られた展示スペースであったため、伝えたい内容を絞ってまとめました。また、もともと資料館で常設展示されている利島の地形模型を有効活用すべく、巡回展の一部に取り入れました。中央博物館で開催した本展と同様に、南北で異なる利島の傾斜に注目し、人が集落や農地として利用するエリアと海鳥が繁殖地として利用するエリアの地形を比較させ、うまく住み分けられていることを伝えました。



利島の地形模型と島の成り立ちに関する展示 オオミズナギドリの生態と危機に関する展示

他に、利島のような火山島が誕生してから、人が住める現在の島の姿になるまでの歴史を解説し、その間に海鳥が果たす役割を伝えました。また、利島で繁殖するオオミズナギドリの生態に関する千葉県立中央博物館の学芸員も参画している最新の研究成果について紹介しました。そして最後に、利島でも深刻化しつつある、ノネコによるオオミズナギドリの捕食や、人工光による雛の誘引といった問題を解説しました。これらの問題はいずれも、大海原に囲まれた島ならではの、在来の天敵や周囲の光源が少ない環境が背景にあります。

利島では、オオミズナギドリが繁殖する他の有人離島と比べて、住民のオオミズナギドリに対する関心が低く、ノネコや人工光によるオオミズナギドリの被害はほとんど認識されていません。本巡回展は、オオミズナギドリが巣立ちを迎える10月下旬から11月中旬をはさむ期間に開催することで、これらの問題に対する関心が高まることを期待して実施しました。

【来館者の声】

- 利島でオオミズナギドリと共存していくために、島民として何ができるか考えたい。オオミズナギドリのことを深く知れてよかった。(年齢無回答・女)
- オオミズナギドリの保護に関心を持った。協力したい。(75歳・女)
- オオミズナギドリと利島は、切っても切れない仲だと思った。昔は海の物よりオオミズナギドリによって人の命をつなげて今があることを感じる。(73歳・女)
- 利島は地形的に平坦地と山地が分かれているので、人と海鳥の共存に適した場所であることを学んだ。(38歳・男)
- オオミズナギドリを守ることは、利島を守ることになると思う。利島の大人のみならず、将来を担う子供たちを通して運動を展開できたら良い。(67歳・男)
- オオミズナギドリを身近に感じられた。(42歳・男)
- 島の字源に関心を持った。オオミズナギドリについてもっと知りたい。(30歳・女)
- オオミズナギドリの飛び方、能力に驚いた。展示が次の学びなる。(40歳・男)
- 利島の地質や周囲の海の状況が知りたくなった。(72歳・男)

■巡回展2

【開催日時】2021年12月4日（土）～2022年2月27日（日）

【開催場所】銚子市地域交流センター

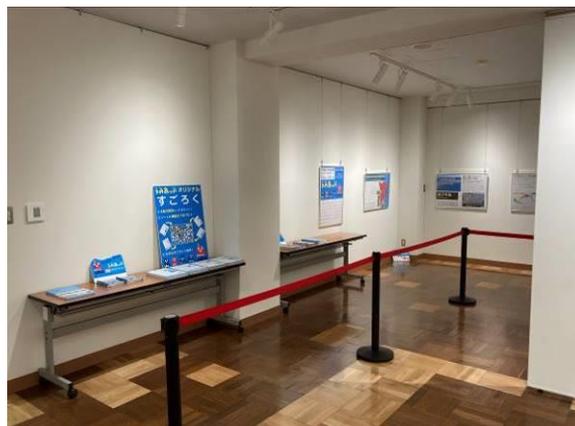
【参加者数】751人

【実施内容・目的】

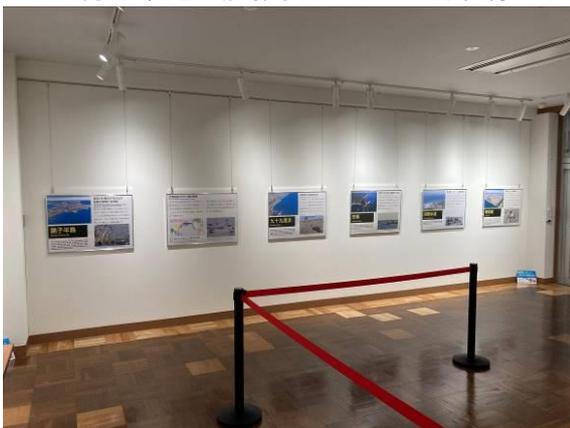
- 千葉県立中央博物館で実施した本展のうち、銚子市とかかわりの深いストーリーを抜粋、編集してパネル展示を行いました。本展に来場できなかった銚子市の住民や観光客に展示内容を伝えることで、海鳥生息地という視点で地域について考えるきっかけを提供することを目的としました。
- 世界中からカモメ類とその愛好家が集まる銚子の魅力を探り、海を通じた銚子と世界のつながりを実感してもらうことを目的としました。



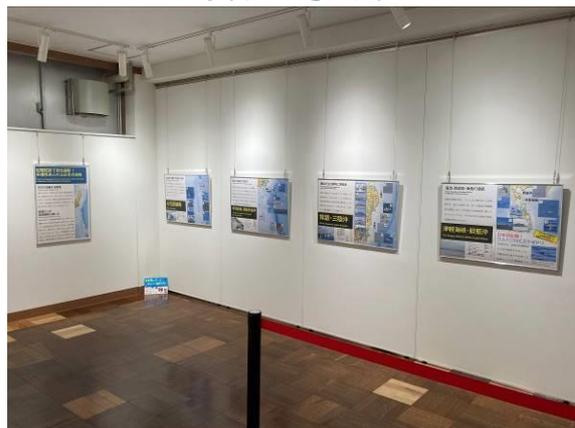
銚子市地域交流センターの外観



展示の導入部



房総半島の環境と海鳥に関する展示



日本列島の海域ごとの海鳥相の展示

世界中からバードウォッチャーが集まる場所は、そう多くはありません。銚子は、カモメ類の越冬地として世界でも指折りの有名な地域です。その理由は、地理的な背景や産業など、銚子ならではの、多くのカモメ類が集まる条件がそろっているからです。地球、日本列島、房総半島という様々な空間スケールの中で銚子を見つめることで、銚子の海の特徴を捉えられる展示を制作しました。



銚子に飛来する海鳥の渡りの展示



銚子の街角で見られる海鳥のデザインの展示

アジア大陸の東縁、太平洋の西縁に位置する銚子には、アジアとアメリカの両大陸からそれぞれに分布するカモメ類が飛来します。日本列島の中でも銚子以北は親潮が到達し、北方系のカモメ類がふつうに見られる南限の地域です。親潮と黒潮が出会う潮目に、日本一の流域面積を誇る利根川から大地の栄養が注ぎ、多くの海鳥の餌場にもなる豊かな漁場が育まれます。また、日本一の水揚げ量を誇る銚子漁港にも、おこぼれをねらって多くのカモメ類が集まります。本巡回展の会期中には関連行事「umi-Trip 漁港編」も開催し、このストーリーを効果的に伝えました。

また、伊豆諸島で繁殖するオオミズナギドリや青森県で繁殖するウミネコが、銚子を繁殖期の餌場や越冬地としていることを示す、標識調査や最新のバイオロギングの研究成果も紹介しました。

【来館者の声】

- 海鳥の生態に関する展示が良かった。銚子は海鳥の宝庫だと思った。(33歳・女)
- 銚子のかもめはすごい。これからは、もう少しやさしい目でもかめを見ようと思った。海は広く、大きくあることで、鳥だけでなく、いろんな生物の大切な場所であると思った。(54歳・女)
- 銚子に飛来する海鳥の行動範囲を知れて良かった。人間も鳥も、想像以上に環境の影響を受けて生きていると感じた。銚子は海鳥にとっても重要な地だとわかり、なんだかほこらしい気持ちになった。(39歳・女)
- 銚子に住んでいるので、銚子に関連した展示が見れて良かった。海一陸は相互に関連して、多様な生態系をはぐくんでいることをあらためて感じた。(45歳・男)
- 航路で見られる海鳥のパネル展示が良かった。環境の変化が激しい中、生物のたくましさに関心されるとともに、美しい海を守るために考えさせられた。(41歳・女)
- カモメがデザインされた、銚子市公共下水道用グラウンドマンホールが展示・活用されていて良かった。今ある海洋環境の大切さや、課題を学んだ。(64歳・女)

【事業全体のまとめ】

海洋生態系の食物連鎖の頂点に位置し、広い行動圏を持ち、海の環境をたくみに使い分けながら暮らしている海鳥の生態を通じて、海洋生態系や海の環境、ひいては人との関係について紹介することができました。

生物学だけでなく、地学や歴史・民俗的な視点も組み入れて展示を構成することで、あらゆる分野に興味を持つ客層に満足していただき、分野横断的に海について考えることの大切さと楽しさを伝えることができました。

付帯事業として、フィールドでの海鳥観察会を実施し、展示で紹介した海鳥と海と人とのかわりを、本物の海で実感してもらうこともできました。参加者には、海や海洋生物に気軽に親しめることや、その面白さを知ってもらうだけでなく、海の環境を守ることの大切さを感じてもらうことができました。

海鳥を材料として、効果的に「海の学び」を展開できることが確認できました。このことは、今後もさらに事業を拡充していきたいと考える中で、大きな収穫となりました。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 銚子ジオパーク推進協議会	巡回展開催
2. 利島村教育委員会	巡回展開催
3. 我孫子市鳥の博物館	標本借用
4. 水産庁	標本借用
5. 銚子市水道局	標本借用
6. 銚子電気鉄道株式会社	標本借用
7. 東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム	標本借用
8. 日立市郷土博物館	標本借用
9. (一社) Islandscare	資料提供
10. 小笠原村教育委員会	資料提供
11. 門川町観光協会	資料提供
12. 鴨川市教育委員会	資料提供
13. 鷗稲荷神社氏子町会	資料提供
14. 環境省沖縄奄美自然環境事務所	資料提供
15. 環境省羽幌自然保護官事務所	資料提供
16. 北九州市立自然史・歴史博物館	資料提供
17. 北大東村教育委員会	資料提供
18. 京都大学瀬戸臨海研究所	資料提供
19. 九十九里町教育委員会	資料提供
20. 神津島村観光協会	資料提供
21. 鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会	資料提供
22. 新潟大学農学部関島研究室	資料提供
23. (一社) バードライフインターナショナル東京	資料提供
24. 北海道海鳥センター	資料提供
25. 御蔵島のオオミズナギドリを守りたい有志の会	資料提供

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 雑誌『BIRDER』35巻6号（文一総合出版）	博物館発！鳥のお宝ツアー、5/16
2. モーニングこんぱす（チバテレビ）	6/9
3. 観光情報7月号（千葉県観光物産協会）	千葉県立中央博物館 [千葉市]、6/15
4. ぐるっと千葉ウェブサイト（ちばマガジン）	【千葉市中央区】令和3年度夏の展示、6/20
5. ぐるっと千葉7月号（ちばマガジン）	地域別イベント情報エリアスコープ、6/21
6. 千葉教育蓮号（千葉県総合教育センター）	情報アラカルト！、6/24
7. 季刊『しま』266号（日本離島センター）	海鳥を通して考える島づくり、6/30
8. ちば県民だより7月号（千葉県報道広報課）	講座・催し、7/5
9. サタディ・プレイシング・モーニング（bayfm）	7/10
10. 京成千葉駅ポスター広告（京成電鉄）	7/12～8/22
11. 観光情報8月号（千葉県観光物産協会）	千葉県立中央博物館 [千葉市]、7/15
12. 雑誌『BIRDER』35巻8号（文一総合出版）	博物館発！鳥のお宝ツアー、7/16
13. 県教委ニュース vol.275（千葉県教育委員会）	県立中央博物館 令和3年度夏の展示、7/17
14. 雑誌『島へ』118号（海風舎）	うみ鳥っぷ、7/18
15. 新京成おでかけ情報誌 Ciao（新京成電鉄）	ちばのいいものコレクションFILE19、7/20
16. 千葉あそび2021夏号（千葉市観光協会）	夏のおすすめ観光スポット、7/20
17. JR車内ポスター広告（JR東日本）	7/20～8/19
18. 船橋よみうり新聞（船橋よみうり新聞社）	街かどほっと情報、7/24
19. フリーペーパー0470（0470-編集室）	令和3年度夏の展示、7/30
20. 県教委ニュース vol.276（千葉県教育委員会）	県立中央博物館 令和3年度夏の展示、8/17
21. 296ニュース（ケーブルネット296）	8/18～20（計6回）
22. 季刊リトケイ36号（離島経済新聞社）	しまぐに日本の海鳥 11/25
23. 雑誌『BIRDER』36巻1号（文一総合出版）	博物館発！鳥のお宝ツアー、12/15
24. 大衆日報（大衆日報社）	銚子漁港でカモメを観察しませんか、1/6
25. 大衆日報（大衆日報社）	「うみ鳥っぷ展」で銚子半島巡る、2/10

以上

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。